

◆ 明日香から鎌倉へのメッセージ ◆

高松塚古墳劣化原因調査 ― 検討会座長に聞く

奈良県・明日香村にある高松塚古墳の「明日香美人」など極彩色の壁画は、1972年に発見され、古代史、考古学ブームの火付け役になりました。その後、石室内で大量のカビが発生、対策が不十分だったことなどから新たな悪循環を招き、結局石室解体で壁画を外に持ち出して修復することになりました。平成22年10月12日、文化庁が設立した劣化原因調査検討会座長の永井順國さん（政策研究大学院大学客員教授）に鎌倉世界遺産登録推進協議会の勉強会で劣化原因に関するご報告をしていただきました。高松塚の現状は世界遺産候補地の保存管理に取り組む鎌倉にとっても対岸の火事とは言えません。

❖劣化について

墳丘部では2001年の保存施設との接合部の天井崩落、2002年には石室内で作業中の機材の横転による壁面の損傷という人為的な事故が相次ぎました。しかも委員会発足まで4～5年間、事実まったく伏せられてきました。石室の中は大変狭く、押し入れの下で作業をしているようなものです。しかも湿度99%の中で行われます。長時間滞在することは禁じられているので、可能な限り短くします。でも作業が遅れるので、できるだけ中に人がいた方がいいという劣悪な状況下での仕事は、事故と無関係ではないでしょう。

❖カビ対策

1972年に発掘されるまでは壁画は高湿度環境の下で、カビに侵されることなく、比較的安定した状態で保たれていました。ところが微妙な均衡はひとたび崩れるとカビの大発生につながる新たな環境に変わってしまいました。高松塚古墳では1980年代初めの「昭和のカビの大発生」に続いて、かりそめの「安定した時期」が訪れました。このためチェック体制も緩慢になり、2000年代初めの「平成のカビの大発生」を招き、万策尽きて石室解体に至ります。壁画も外に運び出して10年かけて修理をしようというもので、作業が続いています。あらゆる物質は劣化を含め時間の経過とともに変化をします。高松塚を含む文化財もこの宿命からは逃れられません。成し得ることは劣化の速度を可能な限り抑えることです。

❖文化財の保存と活用に関する提言

検討会が昨年3月にまとめた報告書では、「過去

を振り返ることで得た多くの反省と教訓、そして新たな知見を未来に向けて活かしていく。単に高松塚古墳壁画の問題に留まらず、報告書は



講演する永井順國さん

文化財全体の保存と活用に資するものでなければならない」として、4項目の提言をあげています。「連携・協働」を核とした保存・管理体制の確立、恒久的チェック体制の構築、「現地保存」の確認、そして未来に向けて「常に備える」ことです。加えて地域の歴史文化を保護する大枠の仕組みを作る必要があるのではないのでしょうか。

❖鎌倉の世界遺産登録について

世界遺産をめざすということは、その文化財の重要性を認知するというではありませんが、文化財の保護体制を町ぐるみ、地域ぐるみで行政一体となって、市民協働のスタイルでその方策を着々と検討し、実行に移すということこそが大事なんだという側面を持っていると思います。

登録されるまでのプロセスが重要です。同時に文化財を総合的にとらえる、有形文化財と無形文化財、民俗文化財あるいは否定されてはいないけれど大事なものがセットとなって、あるストーリーができあがっていくものがあるはずです。そうすれば歴史的景観として、あるいは文化遺産として十分に世の中に通用するものになり得るのではないのでしょうか。そういう努力を伝えるということが大事なのではないのでしょうか。世界遺産登録というのはゴールではなく、スタートなのかもしれません。



高松塚壁画の修復作業（文化庁資料より）

◆ 第3回 世界遺産登録推進のための意見交換会 ◆

足元の文化財を守り伝えること、世界遺産に登録すること

平成23年1月18日(火)、市役所講堂において、第3回意見交換会が開かれました。荒井章さん(意見交換事業実行委員会委員長)の司会で、内海恒雄さん(広報部会長)の鎌倉世界遺産登録推進協議会の趣旨についての説明、野村修平さん(腰越地区町内自治会連合会長)・今井厚さん(同副会長)・松本壽春さん(同副会長)など3名の招待者による、「腰越地域のまちづくり及び腰越からみる世界遺産登録推進活動について」の発表があり、それをもとに、他の地域にも共通した課題などをめぐって参加者による様々な視点からの貴重な意見が交されました。

発表内容や交された意見を要約して紹介します。

■ 鎌倉世界遺産登録推進協議会の活動

平成18年に発足した協議会は80を超える団体が参加する組織で、その趣旨は行政と市民が一体となって登録をめざすことにある。鎌倉の世界遺産登録をめざす活動の特色が市民主導であることを示している。

■ 腰越地区の文化遺産

聖なる空間を画する四境の観念から見た古都鎌倉の範囲は、北の山ノ内から南の小坪まで、東の六浦から西の片瀬川までという広さであった。現在の腰越・片瀬・手広・笛田までを含む〈津村〉は東海道へ出る鎌倉の玄関口に相当する重要な地域であり、七瀬の祓いのひとつで、頼朝ともかわりが深く、鎌倉防衛の要衝の地でもあった江ノ島、日蓮ゆかりの龍口寺、源義経ゆかりの満福寺、宝善院、小動神社など多くの由緒ある寺社や遺跡がある。それらの文化遺産が海や山と一体となって遺されている。

■ 腰越地域のまちづくり及び

■ 腰越からみる世界遺産登録推進活動について

各町内に道祖神や庚申塔などがあり、日常的に市民に親しまれ信仰されている。そのような足元の文化財を大切にしている腰越地区の代表的な年間行事は、1月の腰越漁港での船祝い・左義長(どんと焼き)・小動神社の神楽祭、4月の小動神社祈年祭・満福寺を中心にした義経祭、7月の小動神社ほかの天王祭、8月の納涼祭・夏祭・諏訪祭、9月の腰越みなとまつり、10月の龍口明神社例大祭、12月の小動神社新嘗祭などである。

特に4月の義経祭では龍口寺から満福寺までパレードし高校生など参加者と多くの観客で賑わう。7

月の天王祭はこの地区の主要な祭礼で、海に流され江ノ島にたどり着いて八坂神社に祀られていた小動神社のご神体が、この日小動に里帰りするという由来に基づく神事である。9月のみなとまつりは夕日を眺めジャズを楽しむという市民の行楽行事である。

腰越地区は祭礼などの他、地域の運動会や地区社協主催のサロン事業などを含めて事業内容が多い。そのため役員の数がそろわないと行事が維持できないという問題がある。住民の70%くらいが地元育ちで、10年以上継続して参加する若手が多いことがこの地区の特色であるが、今後とも行事を伝えるためには若手を引き入れて育てていく必要がある。

■ 腰越地区の抱える課題

鎌倉市の指定文化財として登録されている文化財は600件近くあるが、そのうち腰越地区は庚申塔1基ぐらいである。

義経や日蓮に関わる文化遺産が多く存在しながら、それらが世界文化遺産候補地として浮上しなかった理由を検証しなければならない。義経は反体制側の英雄として語り伝えられ、日蓮も権力に抗する法難の伝承が多いが、共に影が薄い。

腰越地区の市民は祭礼や行事などに熱心に取り組んでいるが、この地域の豊富で質の高い文化財に対し、それを掘り起こし伝承していく心が追いつかず、文化財の多くは眠った状態である。候補地とならなかった背景にはそのような事情があるのではないか。文化遺産とは単なる遺物ではなく、それを伝承する市民の精神文化と山や海などの自然とも一体化した歴史的景観でなければならない。

■ 世界遺産登録を

■ 地域のまちづくりにどうつなげていくか

腰越地区のみならず市民の世界遺産登録の意識は高いとはいえない。行政の取り組みの目的は文化財の保護にあり、世界遺産登録を地域社会の発展につなげていくには、地域や各方面の創造的な参画が必要であろうが、他方、市民側には世界遺産登録によるまちづくりなどに関して明確な指針を行政に求める声もあり、両者の間には意識の隔りがある。

世界遺産登録をまちづくりに生かす契機として、1998年に制定された鎌倉都市マスタープランに参加することが有効ではないか。その基本理念は「くらしに自然・歴史・文化が生きる古都鎌倉」である。